

事例2 生活単元学習「ご飯をつくろう」授業の実践（小学校特殊学級）

1. 学級（集団）概要

(1) 児童数

本校は全校児童数が700名弱の中規模の学校である。知的障害学級と情緒障害学級（いわゆる固定の）が設置されている。児童数の内訳は、知的障害学級が1年生1名、3年生1名、4年生1名、5年生2名、6年生1名の計6名、情緒障害学級が2年生2名（A・B）、4年生1名（C）、6年生1名（D）の計4名である。

(2) 指導体制

知的障害学級・情緒障害学級の各学級に、担任1名、指導員（週30時間の非常勤講師）1名の体制で学級を運営している。

生活単元学習等、2学級で一緒に活動した方がよいと思われる場合に、合同で学習している。

(3) 週時程について

それぞれの児童は、交流学級の時間割に添って学習している。交流学習は、児童の実態に応じて行っている。教科の設定をしているが、学習内容が合う時に交流学級で学習している。

今年度の情緒障害学級での交流教科は、以下のようになっている。

A・B：国語の図書、生活、音楽、体育、図工、特別活動

C：理科、社会、書写、国語の図書、総合、音楽、体育、図工、特別活動

D：算数（計算領域）、理科、総合、音楽、体育、図工、家庭科、特別活動

生活単元学習は、学校行事・学年行事に配慮し、また、特定の交流教科の授業時数が少なくなるのを防ぐため、様々な曜日に設定している。おおよそ年間140時間程度である。

(4) 年間指導計画（資料1参照）

2. 実践の経過

(1) 実践の概要

今年度も生活単元学習において、児童の内発的動機付けを重視した授業を考えた。昨年度までに、内発的動機付けを促す要件として、次の事柄を考えて取り組んできた。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① はじめてでもできる② 今の力でできる |
|---|

- ③ 今できていることがわかる
- ④ 今何をしているのかがわかる
- ⑤ 子ども同士のかかわりがある
- ⑥ 選んで活動する場面がある
- ⑦ 大まかな見通しを持つ
- ⑧ わかる資料を子どもが選ぶ
- ⑨ 頼り、頼られる場面の設定

以下、今年度の調理を中心とした生活単元の経過を示す。今年度初めに、児童と一緒に計画を立てたときに、作りたい食べ物が児童からいろいろ出てきた。そこで、今年度は、単元として「朝ご飯を作ろう」「お昼ご飯を作ろう①」「お昼ご飯を作ろう②」「晩ご飯を作ろう」を設定し、児童の願いが実現できるようにした。「お昼ご飯を作ろう」については、長期の休み中に、家庭生活で生かしやすい内容であることから、2回の活動を計画した。デザートやお菓子類については、別単元を設けて取り組むこととした。

(2) 児童の実態、指導目標（資料2参照）

(3) 単元の指導計画（全6時間）

単元は次のように構成した。

第一次 事前学習（1時間）（資料：ワークシート1参照）



- ①赤・黄・緑の栄養についてのおさらい（メニューの中で、赤・黄・緑がそろうように考えようという設定）。
- ②お昼ご飯についてのイメージの確認。
- ③作りたい物を考える。
- ④作り方を知っているかどうかの確認。

⑤作り方をどうやって調べるか，決める。

⑥自分が作りたい物，調べ方の発表。

⑦家庭での活動

ア 自分のメモをもとに，作りたい物を知らせる。

イ 家に材料があるかどうかを確認する。

ウ 材料がなかったときにどうするか相談する。

エ 買い物が必要なときは，できるだけ自分で買い物に行ってみる。手伝って欲しいときは，自分でそのことを言う。

オ 児童によっては，作り方を見せてもらう。

カ 材料を自分でそろえて，当日，持ってくる。

第二次 当日の調理活動（4時間）（資料：ワークシート2参照）

①ワークシートを使い，今日の活動の流れをおさらいする。

②作っていてわからなくなったときに，どういうふうに聞いたらよいか，ワークシート上にサンプルを示しておき，みんなで，読んでみる。

③今日の目標を確認する。

④調理の準備をする。

⑤調理をする。

レシピ等の手がかりをもとに，自分のペースで作る。わからないときは聞く。

⑥試食

お互いのでき上がった物を見る。自分のを試食してもらったり，友達のを試食させてもらったりする。

第三次 事後学習（1時間）（資料：ワークシート3参照）

①何を作ったか思い出す。

②友だちが作っていた物を思い出す。

③作ってみたいと思った物をメモしておく。

(4) これまでの授業展開と児童の様子

昨年度までの調理単元の授業で，学校の活動においては，作る物を自分で選択するということがわかるようになり，自分から取り組もうとするようになった。また，当日の調理の準備については，繰り返しの中で動きがわかるようになり，「早く調理をしたい」という気持ちから，友達と助け合う様子が見られるようになってきた。

ただ，学校では作りたい気持ちを感じられるのに，なかなか家庭で自分から作って楽しむというふうにはならなかった。また，わかる資料を選ぶことをやってみたが，ある程度の見通しが立つ子どもにとっては，選びやすいが，見通しが立ちにくい子どもにとっては，少しむずかしい課題であったように思った。

子どもの記憶・理解を助けるための手だてとして，文字を使っているが，特に書くことになるとスピードに差が出る。書くことについては，書いている途中でよくわからなくなるという様子が出てくると，楽しさが半減していた。

(5) 授業づくりの検討事項及び留意点

- ①学校と家庭との境目がはっきりしすぎていて、学校では自分から楽しく活動するけれど、家庭では自分からできにくい実態がある。

→準備の段階で家庭での活動を取り入れ、調理をきっかけに家族と関わったり、家庭内の物に自分から関わったりする機会を作り、学校と家庭の境を少し緩やかにできないだろうか。

- ②「やり方」への見通しの持ちにくさ

→「作り方を知る方法」についてのイメージを作ると、動きやすくなるのではないか。
「作り方をどうやって調べるか」についての選択肢を設定しておいて、調理単元のたびに、子どもが選ぶ活動を入れてみてはどうか。

- ③書くことについては、「どこを書くのか」探すのに時間がかかっている。

→板書・手元のプリントへ目印をおいてみてはどうか。

(6) 改善した授業展開と児童の様子

- ①家庭と学校をつなぎ、自分から活動しやすくすること

A児は調理をやってみたいという気持ちがとても強い。家庭で準備をしたことで、自分でできるぞという感じが強くなり、調理当日は、「準備してきたからね。ゼーんぶ あるからね。だいじょうぶ。」と活動前からやる気になっていた。

B児は、家庭で準備をしたことで、身近な道具や物についてのイメージがよりはっきりした様子である。調理当日、作業中に「どれだったかな？」と止まることが少なくなり、「あっ、あった、あった。」「次はこれしよーっと。」などのことばが聞かれるようになった。

C児は、家庭の準備では、母親が言うことをききたくない気持ちと調理をやってみたい気持ちとの間で揺れ、ときには、言うことを聞きたくない気持ちのほうが勝ってしまうこともあった。しかし、学校で冷静になったときに話をすると、「あしたは聞いてくる。」とがんばることができた。母親とは、子どもの気持ちや状況について連絡を取りながら、具体的なことばかけなどについて一緒に考えていった。やってみたい活動があればこそその葛藤である。調理当日、「きょうは、準備できたから。」と材料を持ってくると、経過を含めて「やる気だね。えらいね。」とほめた。

D児は、買い物をお兄ちゃんに手伝ってもらったことがうれしくて、学校で朝一番に報告していた。また、調味料等は学校で準備することにしていたので、レシピで材料を確かめたあとや調理当日は、自分の材料のチェックが終わると、「先生、～持ってきましたか？」と確認する念の入れよう、やりたい気持ちが伝わってきた。

②「作り方をどうやって調べるか」を選択すること。

事前学習のプリントで、次の3つの選択肢を準備した

- | |
|-------------------------|
| ア 作っているところを家族の人に見せてもらう。 |
| イ 作り方を家族の人に聞いてメモする。 |
| ウ レシピをさがす。 |

A児・C児・D児は、選択肢の中から、ちょうどよいものを選ぶことができた。「おかあさんに、いつできるか、きいてみよう。」とか「冷蔵庫にあったかなあ。」など、次の行動を自分から考えるきっかけになり、当日の調理活動においても、その意欲が生かされていた。

レシピを準備する段階では、赤ワインなど珍しい材料があるときには、「ねえねえ、家にあるの？」などと聞きあったりする様子も見られ、お互いの意識付けに役立った。

B児は、「作り方、知ってる？知らない？」と聞かれると、「それではできないだろうなあ。」という場合でも知っていることが一つあれば、「知ってる。」と答えてしまうところがあった。安心して知らないと言いくかたりしているようだったので、「それ、知ってるんだ、すごいね。Bちゃんが知ってること、先生が書いてみようか。」と書きとって、「この通りにやったらできるかな。」と尋ねてみることにした。そうすると、頭をかしげるので、「そういうときは、知っていても知らないって答えておくといいよ。」と、答え方の練習をしていくことにした。「それで、どうするかな？」と尋ねると、安心して「おかあさんに見せてもらう。」と言うようになった。

③「書くこと」への環境調整

板書・プリントに矢印を置き、「今書くこと、書く場所」を目立たせること、文字の見本の準備等の工夫で、活動しやすくなってきた。

3. 成果と課題

(1) 児童生徒の変容

A児	○日常でもいろいろな場面で「どうやって?」「どうやるの?」を聞くようになってきた。 ○学校の調理で卵焼きを作った日に、家庭で弟に「卵焼き、作ってあげようか。」と作ってあげていた。また、シチューを作って残りを家に持って帰ったときには、「寒くない?あったかいシチューがあるよ〜。」とアピールしていた。
	○自分のエプロンや三角巾の準備に一生懸命で、家庭科室に来たときに、「あ

B 児	<p>れ？レシピは？」と気づくことが多かったB君だったが、この活動が3回目になると、「これ、忘れちゃあいけんね。」と、自分から持ってくるようになった。</p> <p>○自分で決めたメニューにチャレンジすることで、さいごまでやりきりたいという気持ちで取り組むことができた。お互いが作ったものを試食するときには、「ねえねえ、これ、食べてみたい？」と自分のお皿を持って友達のところを回っていた。他の人のも食べてみたいけれど、自分が作り上げた自慢のおいしい物を試食して欲しいという気持ちが、行動に表れていた。</p> <p>○「～君のチャーハンが作りたい。」と言い、夏休みには、レシピのコピーをさせてもらって自宅に持って帰り、作ってみた。また、3回目の活動では、家庭で食べておいしかったもののイメージから、作りたい物を決めることができた。夏休みの課題で作ったことが自信になったようで、10月ごろには、冷蔵庫を開けて、何があるか確認してから、「作ってあげよう。」と自分から調理をしようとする様子が見られた。</p>
C 児	<p>○特に、交流学級の担任の先生や友達に食べてみて欲しいという気持ちが強く、「どうしても！」と、自分で試食用にお皿やスプーンなどを準備して、クラスに持っていった。友達からの評判もよく、「レシピを作って、クラスの人にプレゼントしよう。」という活動にも広がっていった。</p>
D 児	<p>○今年度に入って、「いつ、作るの？」と尋ねてくるようになった。いち早く保護者向けの次の月の行事案内を見つけると「見てもいい？」とチェックを入れ、いつかわかると、料理の本を探しに行っていた。それに、触発されて、A児・B児・C児もなんだかわくわくして、「考えようっと。」というふうな様子になっていった。</p>

(2) 授業づくりの成果

①家庭と学校をつなぎ、自分から活動しやすくすること

家庭での準備というワンクッションをおくことで、学校での活動に向けての意欲を高めることができた。場所が違うところで、「これを作るためにこの準備をしておこう。」というような心づもりをする機会になり、子どもの中では別々であると感じられていた家庭と学校という2つの場所をつなぐことができたと思う。それは、「調理の活動が楽しい」という前提があつての楽しい準備であるので、両方がよい循環になり、子どもの活動への意欲が高まったのだと思う。

また、短い時間ではあつたが、2回ほど保護者や兄弟に見てもらい、活動の様子を知ってもらった。場面を見て、子どもが自分でやっているということを意識された保護者は、子どもへの調理の見せ方やレシピの書き方、材料の準備の仕方など、子どもが活動しやすくなるよう工夫されるようになってきた。家庭で、子どもが何

かに取り組もうとしたとき、「やろうとしているんだね。」という気持ちで見てもらえるようになったことも収穫である。学校の活動できっかけを作り、子どもの家庭での活動をやりやすくすることができたように思う。

②「作り方をどうやって調べるか」を選択すること。

「作り方をどうやって調べるか」について選ぶ機会を作ったことで、「どうやって」を考えるとということが子どもの中で意識付いてきたように思う。「どうやって解決したらよいか。」のパターンをいくつか示し、その中から選ぶことを繰り返して学習していくことが、自分で「こうしてみよう。」と決めることにつながり、活動に集中する力を作り出していると思われる。

レシピ

洋風炊き込み御飯

作るの簡単、おいしいよ。

材料

チルドハンバーグ 2枚
ミックスベジタブル 1/2カップ
ナポリタンソース缶 1缶
米 2カップ (400CC)
バター 大さじ1

作り方

- 1 米は洗って、ザルに上げ、水けをきる。
- 2 ハンバーグは、それぞれたて半分に切ってから、8等分に切る。
- 3 炊飯器の内釜に米、ミックスベジタブル、ハンバーグ、バター、ナポリタンソース 水1/2カップ (100cc) を入れて混ぜ、普通に炊く。

お料理メモ
冷凍ハンバーグがないときは、ソーセージを使ってもおいしくできるよ。

以上、ご紹介は でした。

また、なんとかして作り上げたいという気持ちから、「援助を求めること」についても積極的になり、子どもの間での頼り、頼られる場面の頻度が増えてきた。「自分でできる」と思っている場面では、助けを求められた友達が「それはねー。」と操作をやってしまおうとすると、「待って。待って。自分でやってみるから、やり方だけ教えて。」と言う子どもの姿が見られるようになった。

③「書くこと」への環境調整

書くことについては、特に板書での目印が、「～ちゃんが、今どこを書いているのかよくわかる」という意味で、子どもが子どもに教えやすい状況を作ることに関与した。

また、矢印がB児にとっては、「わかるようになるもの」の象徴となり、別の調理場面で「どうやったらわかるかな？」と尋ねたときに、矢印を持ってきていた。

(3) 今後の課題

①課題解決の方法の選択肢の準備

「こうやってやったらできたね。」という体験を具体的に繰り返していくことで、自信をつけ、自ら楽しく取り組むことにつながっていくと思う。今後も、作業過程の理解・実行だけでなく、「どうやったらできるか」にも目を向けて考えることができるよう、それぞれの子どもの成長に合わせた選択肢を準備する必要があると思う。

②友達との関係を生かした展開

興味が広がりにくいと言われる子どもたちである。学年差がある実態を生かして、友達の動きを見ることや、必要に応じて助けられたり助けたりすることで、友達への興味を広げたい。授業での意図的な場面設定が今後も必要である。

材料・道具・料理への興味、または、友達自身への興味から、「友達の～を作ってみたい。」という気持ちが出てくる。ここから、活動の広がりが期待できるので、友達がやったことへ意識を向けるおさらいの活動を今後も大事にしていきたい。

③自己評価力の育成

「どうやったらできたか」「どれだけできたか」を、何らかの形（文字・絵・写真等）で残しておいて、子ども自身が自分でできたことをふり返り、何度も「こうやったらできたね。」「こんなにやったんだね。」と確認しあうことも次の活動への動機付けとして大切であると思われる。

どの授業においても、内発的動機付けの要素は大切である。他の教科別の指導においてどう実践していくか、力に違いがある実態をどう生かしていくのかが今後の課題である。内容・方法について、具体的に考え、実践していきたい。

資料 2

この単元における児童の実態と指導目標（及び手だて）

	A	B	C	D
人とのやりとり	自分から友達に働きかけるようになった。 ○ 必要以上の働きかけをするところがあるので、適度なところで止められるようにしたい。 具体的なやりとりを目の前でやってみせることで、「よりよいかかわり方」を身につける。 思い入れが強く、友達と離れたくない時には、「お手紙」など、別の手段で、気持ちを表すようにする方法を使ってみる。	自分から友達に働きかけるようになった。 ○ 特定の友達へのこだわりから、友達がして欲しくない働きかけをしてしまい、友達との関係を崩してしまっているところがあるので、調整できるようにしたい。 具体的なやりとりを目の前でやってみせることで、「よりよいかかわり方」を身につける。 また、「みんなの前で言わない方がいいこと」については、書き言葉を活用して、調整できるようにする。	D児をとても頼りにしている。「手伝って」「教えて」と、援助を求められることができる。 ○ 自分ができることまで、人任せになり、あきらめてしまう面があるので、自分でできることを意識し、言えるようにしたい。 具体的なやりとりを目の前でやってみせることで、「よりよいかかわり方」を身につける。 C児が自分でできる場面をタイミングよく教え、「これは、ぼくができるよ。待ってね。」と言う学習をする。また、その姿を低学年の児童に見せ、C児の励みにする。	低学年の児童へのかわりが出てきている。 ○ いろいろなことができるようになり、自信がついてきている。やっであげるほうが早いので、ことばで相手の了解を求める前に、やっしてしまいがちになることがあるので、相手の様子を見ることを習慣づけたい。 具体的なやりとりを目の前でやってみせることで、「よりよいかかわり方」を身につける。 友達の動きを待つことができたとともに、「今は、よく待っていたね。～君、自分でできてうれしかったと思うよ。」とはめる。
意思表示	やりたいときには、自分で言う。 やりたくないときに、「やりたい？ やりたくない？」と尋ねると、返事が返ってくるようになってきている。 ○ 返事が返ってこないときには、整理して示す。	やりたいときには、「ぼくもやりたいうよ。」と言えぬ場面が出てきた。わからないことや困ったことがあると、頭の中の全く違う場面に行ってしまうことがあるので、「今は、わからないよ。つて言ったらいいんだよ。」等、その場で教え、言い直して「それがいいんだよ。」とはめるようにする。 ○ やりたいことを選択肢で示し、選べるようにする。大きな見通しを示すことよって、「知っている」「知らない」が表現できるようにする。	日常の意思表示は、スムーズにできる。 ○ 「何をしたかったの？」と尋ねることにより、やりたかったこと・やりたかった気持ちがいよほどつきりするようにする。	日頃の意思表示はできる。「～だからね。」と理由を添える様子も出てきた。 ○ 何か引っかけかかっていると、思考が難しくなることがあるので、担任がいくつか選択肢を提示し、その中から選ぶ。
選ぶ	「これがいい！」と資料を指さすことができるようになった。 ○ 何を選ぶのかわかかろうに、資料提示をし、他児が選ぶ様子を見ながら準備し、時間がかかっても自分で選んでみる。	A児と同じ	「見えない」と思っているところがあり、自分が選ぶ場面でも「ま、いっか。」と手近にある物を選んだりすることがある。 ○ 「見えるか見えないか」を確かめた上で、ことばで説明をし、自分で選ぶ。	自分で選ぶと、気持ちを継続させることができる。 ○ 選ぶときに、選択肢を提示して、「選ぶよ」と増やす。

見通し・計画	<p>やったことがあることについては、先を読んでも、手伝うことができると聞く様子が出てきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 写真・文字を使い、自分で動ける場面を増やす。 繰り返し学習により、活動の大きな見通しがもてるようになる。 	<p>慣れた活動については、大まかに活動内容を思い出して言うことができるようになること。「今、やっていること」への集中が難しいことがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 文字が読めるようになってきたので、各手順を2～3語文で示す。「今、やること」を矢印で示し、つかみやすくする。 繰り返し学習により、活動の大まかな見通しがもてるようになる。 	<p>今までの活動を思い浮かべることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「次はなにをしたらいいかな？」の質問に答える。書くことはあまり得意ではないので、記憶を助けるために、短いことばでメモする習慣をつける。 	<p>大まかに活動内容をとらえることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 活動がうまくいくための順序については、自分で予測をたてるのが難しいので、一つ一つ、内容を確認しながら、本人と一緒に組み立てる。書いた資料を準備し、やり終わった項目をチェックしながら、やっていくことで活動がうまくいくようにする。
お金	<p>空位がない3桁の数を読むことができる。硬貨の種類と名前がわかる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ はじめに硬貨の種類と数を言ってみて、本人の反応を見、出せないときには、必要なお金のジグを使い、見てそろえられるようにする。 	<p>3桁の数を読むことができる。硬貨の種類と名前がわかる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ はじめに硬貨の種類と数を言ってみて、本人の反応を見、出せないときには、必要なお金のジグを使い、見てそろえられるようにする。 	<p>4桁の数字を見て、お金をそろえることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 金額の「高い」「安い」という感じをおおまかにつかんでいけるので、いろいろな場面で「〇〇、～円だっ！」と、金額を讀んで聞かせ、反応を引き出す。 	<p>おつりがほしいわかる。「～人分の計算」のイメージがわかり始めたところ。(数字での計算は、分数的なかけ算・わり算までできる。比を使って、4人分の材料から2人分の材料を計算することもできるようになった。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 買い物の場面で、「この金額だったら財布の中のお金を出せばよいか」と尋ね、「それだったら大丈夫だね。」と確認する。
歩く	<p>歩行時のバランスが不安定。斜面や段差に気づきにくく、転びやすいので、大人と手をつないで歩いていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 安全確認の仕方について実地で学習する。 	<p>周りに気が散りやすいが、前の人との間隔をだいたい保てるようになってきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「前を見てね。」という言い方で、前の人存在に気づくようになる。立ち止まって左右を見る習慣がないので、安全確認を実地で学習する。 	<p>自分が見る信号が、わかるときとわからないときがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 信号を渡るたびに、大人と一緒に確認する。 	<p>道路で、自分一人ならば、ほぼ安全に歩くことができる。駐車車両など物陰からの安全確認については、ことばかけが必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 様々な道路状況（仕事をしている人がいる・工事中など）に応じて、どこを通ったらよいか、どこにいたら安全かを立ち止まって考えるようになる。

調理	<p>何かを作ることは大好き。</p> <p>○ 文字を一文字ずつ読むが、2～3語文であれば、意味がつかめるようになってきている。 写真を介在させて、そろえるもの・やることがわかるようにし、自分で動けるようにする。 「はかる」ことが何を使得どうすることなのかは、わかるようになつてきた。量感があまりないので、材料の準備の仕方を工夫し、「だいたいこのくらい」がつかめるようにする。量の単位のことばやはかる道具に慣れる。 調理の動作が難しいときには、大人が手を添えて、動きがわかるようにする。</p>	<p>何かを作ることは大好き。</p> <p>○ 書いてあるものが読めるようになってきているので、「どこを読めばいいのか」がわかるようになって、作業が進むようにする。「はかる」ことが何を使得どうすることなのかは、わかるようになつてきた。量感があまりないので、材料の準備の仕方を工夫し、「だいたいこのくらい」がつかめるようにする。量の単位のことばやはかる道具に慣れる。 調理の動作が難しいときには、大人が手を添えて、動きがわかるようにする。</p>	<p>作ってみたい気持ちはある。</p> <p>○ 読む力を最大限活用する。 読みやすい大きさの文字の資料を準備する。 調理の経験が少ないので、材料や道具が「どんなものなのか」「どう使うのか」を知らないことがある。気軽に聞いて、解決できるようにする。 包丁の使い方については、刃先の向きに注意することがむずかしい。教師と一緒に5～6回切ったあと、本人が1回切るようにし、動かす方を学習するようにする。</p>	<p>休憩時間に料理の本を読んでは、うれしそうにしている。</p> <p>○ レシピを読むことができるが、順序にこだわらないところがあるので、「今、どれやっただの?」「次は?」等、確認のことが入って、気付かせられるようにする。 だいたい動作はできるので、自分が作るだけでなく、友達に目を向け、働きかけができるようにする。どのように助けたいのかを実際にやってみせ、実行できるようにする。</p>
----	--	---	--	--